

目次

(1)	1
(2)	1
(3)	2
(4)	3
(5)	4
(6)	5
奥付	
奥付	8

(1)

先日仕事をやめ、インターネット上に人生相談のサイトを開いた。相談は基本的に無料。パソコンの前で解決することなら何でも可。探偵や便利屋とは違うので、足をつかうことはしない。ただどうしても、という人のために、相談には応じると書いておいた。開設から三日たったが、感触は悪くない。一日あたり数件の相談がある。回答者の私がまったくの無名であることを思えば、意外なほど多いと言える。

無料にしているのは、敷居を低くしたいからだ。退職金も十分すぎるほどもらい、養う家族もなく気楽な身分だ。嫌がらせや面白半分での相談もあるかもしれないが、本当に必要な人が気兼ねなく助けを求められる。自分にとってはそれが何より重要だ。

勤めていたころは、社内のトラブルを解決したり、お局様と新入社員の間にいったこともある。もちろん双方ともに満足する円満解決。次第に揉めごとが起りそうだからと、予防の意味で呼ばれるようになった。営業で客先へ赴き、悪いけど頼むよ、と駆り出されたこともある。外国人社員との揉めごとも解決した。自分で言うのも何だが、問題解決のエキスパートとして頼りにされ、重宝されていた。

男性にとって問題解決は、人生における最重要課題といっても過言ではない。どれだけ問題を解決できたかが男としての評価につながると、私は本気で思っている。

インターネットの質問サイトで回答するようになったのも当然の流れで、たびたび「ベストアンサー」の荣誉に浴した。最初のころは、質問に答え、お礼を言われるたび、何だかもよもやした気持ちになった。相手が目の前にいないことが、ころもとなかったのかもしれない。本当にこの能力が、世の中の役に立つのだろうか。そんな風に思ったのを覚えている。

それでも回答を繰り返すうち、決意が固まった。この能力を生かして、人様の役に立ちたい――。質問サイトで回答を始めて二年後、思い切って退職願を出した。上司や同僚から強く慰留されたが、私の意志が固いと知り、みな了承してくれた。

そして、私は仕事をやめた。

(2)

パソコンを立ち上げ、管理者画面を呼び出す。知人に教えを乞うたとはいえ、一から自分で作り上げた。愛着もひとしおだ。

〈相談メールが一件あります〉

お知らせを見て、自然と頬がゆるむ。順調、順調。

「さて、ちゃちゃっと解決、といきますか」

お知らせをクリックして、メール本文へ。まずヘッダーが現れる。相談者は四十代女性。人によりニックネームを使うこともあるが、この相談者はニックネームを使わない「ゲストさん」。どれどれ、どんな相談かな。

『初めて相談させていただきます。ここ四年ほど、小説家を目指して努力してまいりましたが、これ、という作品を書き上げることができません。途中で終わってしまうものも多く、書き始めても、途中で違うと思うと、書き進められなくなってしまいます。完結しているものも、大したことはありません。最近は小説を書く時間より、小説家になるのをあきらめたほうがいいのだろうか、考える時間のほうが長くなりました。やはり、あきらめたほうがいいのでしょうか。ご回答をお願いいたします。』

ふむ、と私は思った。この手の相談者はどうしたらいいのか、本当は自分がいちばんよく知っている。それが正しいかどうか分からなくて相談してくるのだ。まずはボールを投げてみよう。

『ご相談、たしかに承りました。小説家を目指していらっしゃるとのこと、素晴らしいですね。私は読む専門なので、書ける人を心から尊敬いたします。

あきらめたほうがいいだろうか、というご質問ですが、残念ながらお答えすることはできません。あなたがこれまでお書きになった小説をまったく読んだことがないうえ、あなたご自身のことも存じ上げないからです。でも、あなたは解決策をお持ちではないでしょうか。私にはそう思われるのですが、いかがですか？』

送信をクリックする。返信はすぐには来ないだろう。朝食にしよう。パソコンの前から立ち上がった、そのときだった。ピン、と音がして、〈メールが一件あります〉との表示。まさか、もう来たのか？ パソコンの前に座り直し、メールを開いた。

(3)

『さっそくのご返信、ありがとうございます。メールを読んで、はっとさせられました。たしかに私は、どうしたらいいか知っているような気がします。でも本当にそれでよいか分からないのです。大変恐縮ですが、これから書くこととお読みいただいて、ご回答いただけないでしょうか。よろしく願いいたします』

ええ、いいですとも。そうつぶやいて画面をスクロールし、本文を読み進める。

『何が問題かと申しますと、私の書くものは日本人向きではないようなのです。通っている講座の先生が、私の提出したものを読むたび、そうおっしゃいます。ほかの受講生の方からも、何度かそう言われました。したがって小説を書くのをやめるか、日本人に理解できる小説を書くか、ふたつにひとつなのです。

実はインターネット上でも作品を発表しており、小説も小説でないものもあります。小説でないものは批評というか、評論のようなものです。自分としてはこちらのほうが、書いていて楽しく感じられます。何度かおほめの言葉もいただきました。

読書サイトに本の感想も投稿しておりますが、六十八件あるうち、六件について高評価をいただきました。このサイトでは登録者同士、互いに評価し合うことができるようになっています。本の感想を投稿し、私の感じた面白さが共有されるのは、格別の喜びです。もちろん小説も楽しいのですが、最近は読むほうが楽しくなってきました。これまでも、小説以外のものを書いたほうがいいかもしれないと感じていましたが、最近とくにその思いが強くなっています。

小説を書くのは、まるで暗くて長いトンネルに迷い込み、必死に出口を探すようなものです。前進して出口に近づいたと思っても、ただひと筋の光も見えず不安になり、方針転換の衝動にかられます。でも、本当にそれが正しいのか分かりません。

幼いころからお話を考えるのが好きで、今でもテレビのニュースを見ながら、こうだったら面白いのに、などとよく考えます。面白いかどうかで世の中が動いているわけではないのですが、そうだったらいいな、面白いな、とついつい考えてしまいますので、小説を書かない自分がどうなってしまうのか、見当もつきません。かといって、今の状態はあまりにも辛すぎて……私はいったい、どうしたらよいのでしょうか』

(4)

読み終えて、ふーっと息を吐いた。

これは、一筋縄ではいかなそうだ。

返信を考える前に、朝食をとることにした。腹が減ってはいくさはできぬ。

立ち上がって台所へ行き、コーヒーメーカーに水を入れ、フィルターをセットした。コーヒーは、京都から取り寄せている。なかなか味わいが深く、頭を働かせるにはちょうどいい。

それからシリアルに牛乳をかけ、冷凍のいちごを数粒、上から落とす。甘酸っぱい匂いが鼻をつく。一瞬ののち、コーヒーのふくよかな香りがたちのぼる。何とも食欲をそそる組み合わせだ。

「さて」

食事にしよう。

食べながら、質問のことを考えた。日本人に理解しづらい、と相談者は書いていた。評論や本の感想を投稿している、とあったが、ほめられたり、花丸をつけてもらったりするのは、分かりにくくはないということだ。簡潔に、要点がまとまっているのだろう。そしておそらく、単語の選択が中立的なのだ。単語の意味をあらかじめ限定せず、定義しながら論を進めるには、中立的な単語選択が欠かせない。

日本語は、どんな単語であれコンテクストを伴う。たとえば「異端」と言うとき、単に「正統」に対置する概念として言うのと、「異端扱いされている」というように、ネガティブな意味で言うのでは、受け取りかたがまったく変わる。日本人はとくに言及しなくても、後者の意味で捉える人が多い。

日本語はハイ・コンテクスト、高度に文脈依存であり、言わなくても分かるよね、という文化だ。言わぬが花、あれこれ言うのは野暮てえもんよ、てな具合に。私自身、外国

人と接して初めて知ったことだ。評論でも「言いすぎ」は禁物だが、それはある程度の知識を前提としているからで、小説とは異なるだろう。

さてどう回答するか、だが.....。

腕を組み、空っぽのコーヒーカップを見つめた。なかなかいい案が浮かばない。小説など書いたこともないし、まとまった量の文章を書いたのは何年前だったか。私のような人間に、まともな回答ができるのだろうかと不安になる。

(5)

ため息をつき、天井をあおぐ。サイトを立ち上げて一ヶ月。初めてぶつかった壁だった。相談内容を読むかぎり、可能性ということだけ言えば、小説を書かないほうが大成するかもしれない。それでも、小説をやめなさいとは言えない。いや、言いたくない。私にしてみれば、小説を書けるだけで素晴らしい。内容は二の次、とは言わないが、書けるのに書かないのはもったいないし、大げさかもしれないが、人類にとって多大な損失だと思うからだ。何か、よい方法がないものだろうか。

「待てよ.....」

ふと、ある考えが浮かび、頭の中で再検討してみる。いけそうだ。パソコンの前に移動すると、管理者画面を呼び出した。

『返信ありがとうございます。ご相談内容をたしかに承りました。大変深刻にお悩みのご様子、気をひきしめて回答させていただきます。まず、可能性という点から申し上げますと、たしかに小説を書かないほうが大成するかもしれません。ですが、私はぜひとも、小説を書きつづけてほしいと思います。つまり小説をやめる必要はありません。そしてもう一点、日本人に理解しやすい小説を書く必要もありません。あなたの特性を生かせる小説がきっとあるはずですよ。』

そこでご提案ですが、評論と小説を合体させてはいかがでしょうか。たとえば小説の中で評論を書く、またある本について語る様子を小説にする、などです。具体的なアイデアをご提示できないのは残念ですが、一考の余地があると思われます。

もうひとつのご提案は、日本人を啓蒙する小説です。日本人は外からどう見られているかを非常に気にします。幕末に日本を訪れた外国人の日記など、外から見た日本に関する本が読まれるのは、日本がどう見られていたか、知りたいからではないでしょうか。外国人の眼から見た日本について、ビジネス書や啓発本は多く目にしますが、小説は、少なくとも現代においては、あまりないように思われます。私の勘違いでしたら申し訳ありません。

小説を書くのは暗くて長いトンネルに迷い込んだようなものだ、とあなたはお書きになりました。しかしトンネルには必ず出口があります。たとえ今は一筋の光すら見えなくても、続けたい気持ちが少しでもあるのなら、どうか今一度、頑張ってみてください。あなた様のご健闘を、いつの日か努力が大きく実を結びますことを、心よりお祈り申し上げます。回答とさせていただきます』

送信をクリックし、大きく息を吐く。重大な仕事を任され、無事やり遂げた。そんな気分だった。

(6)

果たして役に立っただろうか。質問サイトで回答を始めたころのように、パソコンの向こう側に思いを馳せた。

目の前に相手がいれば、無事解決されたと分かるし、喜ぶ顔を見て安心する。だがパソコンを隔てた問柄では、問題が解決したのか、相談者がこの先どうするつもりなのか、知ることはできない。もちろん、実り多い人生を歩んでくれるよう祈ることはできるし、それが今、私にできるたったひとつのことなのだが――。

ピン、と音がした。メールだ。

ほんの一瞬ためらったあと、メールを開いた。心臓の鼓動が、耳もとで聞こえる。

『心のこもったご回答をありがとうございます。読ませていただき、思わず涙がこぼれました。小説をやめなくてもよいと言っただけで、迷いが吹っ切れ、気持ちが楽になりました。こんな私にも、適した小説があるかもしれない。そう考えただけで、何だかワクワクして、希望が見えてきたような気がいたします。いただいたご提案を参考にさせていただきます、もう一度頑張ってみようと思います。本当にありがとうございました』読みながら、全身の力が抜けていくのを感じた。緊張が解けたような、心地よい気分だった。

「よかった――」

そのとき、ピン、と音がした。〈相談メールが一件あります〉の表示。さて、次はどんな相談だろうか。

おわり

奥付

奥付

人生相談

<https://puboo.jp/book/80008>

著者：比良岡美紀著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ <https://puboo.jp/book/80008>

ブックログ本棚へ入れる <http://booklog.jp/item/3/80008>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<https://puboo.jp/>）運営会社：株式会社ブックログ

{{-
-}}

人生相談

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
